小学校六年の部　佳作

対象作品／芥川龍之介著『鼻』集英社

自分を好きになるために

弘前大学教育学部附属小学校　吉田蒼汰

「ぼくと似ている。」自分と重なると、痛いほど気持ちが分かる。この本は、あごまである長い鼻を気にしている禅智内供の話だ。

ぼくも内供と同じように、見た目で気にしていることがある。しかも、悩んでいることも知られたくないという面どうくさい性格もぼくと同じだ。「日常の談話の中に、鼻という語が出てくるのを何よりも惧れていた。」とある。すごく分かる。ぼくも学校で、自分の気にしている話題が出てくると息をひそめている。そんな時は、心の中はもやもやとした気持ちでいっぱいになる。だから、鼻が短くなった内供の姿は一度はホッとした。それなのに、鼻が短くなった内供は、また笑われてしまう。ぼくは悲しくなった。町の人は仏に仕える人なのに、鼻のことなんか気にしてかっこ悪いとばかにしていたのだと感じた。その気持ちを内供は「もう一度その人を、同じ不幸に陥れてみたいような気にさえなる人間の一面」と言った。ぼくは、こんなこと思う人いるのと思ったけれど、ぼくにも弟がしかられている時の少しの優えつ感のような、そんないじわる心がある。でも、それはほんの少しのいじわる心だ。町の人達も、ちょっとのいじわる心で内供を笑ったのだと思う。けれど、それがたくさん積み重なり、内供は経文を読めなくなり、徳の低い怒りっぽい人間になってしまった。ぼくは、鼻が長い時よりも、短くなってからの笑いの方がつらいのではないかと思った。外面をばかにされるよりも、内面をばかにされるほうが、他人に自分の価値がないと言われているようで傷つく。内供に、「鼻が長くても別に良いじゃん」と寄りそってあげる人がいれば、内供はつらい思いをしなかったのだろうか。自分だったらそう内供に声をかけたくなる。でも、自分も気にしていることを「別に良いじゃん」と言われても、たぶん解消できないと思う。でも、内供は自分で乗りこえた。きっと内供は、自分は自分とありのままを受け入れられたのだろう。その明るい風景が、「庭は黄金を敷いたように明るい」「まだうすい朝日に、九輪が

まばゆく光っている」と書かれていた。明るい朝が、仏様のように輝(かがや)いていて、ぼくは内供が人の目を気にする心をのりこえて晴れ晴れとした気持ちになれてよかったと思った。鼻が長かった時は、鼻しか見れていなかったからよけいきれいに見えたのだと思う。

もう内供は、鼻をばかにされても気にしないだろう。つらい気持ちがあったからこそ、今までより人に寄りそってあげられるだろう。他の人からの視線は、時に自尊心を傷つけられることもある。ぼくはまだ周りにふり回されてしまう。でも、ぼくはそのままのぼくだと受け止めれば、こわがらなくてすむと思う。自分の価値は自分で決めて、自信をもってむかえる朝は、きっと今より明るいはずだ。